原の自然棲息環境に放置した100 個体における活動個体の%で示した。この場合の活動個体とは、腹足を殻外に伸しているものを云う。5月25—26日の記録では他の時期に比し活動が盛んである。活動の山は夜間にあり、夜明けと共に減少し始め、昼間は微弱な活動を僅かに示すだけである。こゝでは温度湿度共に重要な要因ではなく、この活動型を支配しているのは照度と考へられる。夜間活動には2つの山がある。照度低下により惹起される第1の山と照度上昇の刺激に反応して起る第2の山があるが、その間3時頃44%まで活動が低下する。本種が夜行性であることやその山が大きく巾広いこと等から考へて、第1の山が摂食活動等の本来の活動であり、第2の山は照度上昇にともない暗所にかくれようとする逃避活動であると考えられる。次に8月2—3日の記録では活動の山が夜明けだけになっている。これは高温の影響も幾分あると思はれるが、この日は1ヶ月近くも雨が無かつた為河原の池もすべて涸れてしまつて観察地は極端に乾燥していたのでそれが主因であろう。宮入貝の活動にはその接触面が湿っていることが必要なので、乾燥が正常な活動型の発現をさまたげたものと考えられる。夜明け時の活動が露により地表面が湿つてはじめて現れたことによつても、この事実は裏がきされている。次に11月23—24日の記録であるが、これでも活動の山が一つである。然しこゝでは全体に極めて微弱な活動である。勿論この期は乾燥期であるが、それと共に低温の影響も大きい。朝露がとけて地表面が湿つても活動は始まらず、気温が上昇して10℃近くなつた10時に僅か20%ではあるが活動の山が現れる。以上から、宮入貝は夜行性で環境依存的日週期活動をもち、それは気温・接触面の湿潤状態が好適である時期には主として照度の変化に支配されている。又その正常な活動を抑制する要因は、接触面の乾燥・10℃以下の低温であると考えられる。(久留米大・医・寄生虫)

沖縄八重山に於ける *Latrodectus hasseltii* Thorell, 1870 と、その咬螫症の一例に就いて: 利岡静一・安仁屋賢一・浦崎長枝 Toshioka, S., Aniya K. & Urazaki, N.: *Latrodectus hasseltii* collected from Yaeyama Islands, with a clinical case record of this species

演者等によつて琉球列島には未記録であつた *Latrodectus hasseltii* Thorell, 1870 を1955年11月、琉球八重山群島の石垣、西表の両島から採集したことと西表島の大原部落に於いて本種による咬螫症患者の発生に就いて

の報告を行つた。(東京文化医学技術、八重山保健所、八重山・経済課)

蛇毒亜鉛の研究(第4報) 毒蛇(マムシ)と無毒蛇(アオダイショウ・シマヘビ)各組織内亜鉛の比較定量的研究: 大瀬貴光・辻川利雄 Ohse, T. & Tsujikawa, T.: Zinc in snake venom IV. A comparative and quantitative analysis of zinc in the tissues of venomous and non-venomous snakes

マムシ、シマヘビ及びアオダイショウの各体組織内の亜鉛の定量分析を行つてその濃度分布の比較を行つた。湿式灰化の後、デチゾン・クロロフォルム法により光電比色計を用いて計測した。その結果を要約すると次表の如くなる。

各種蛇臓器別 Zn 濃度分布表 (r/g)

種 臓器	まむし		しまへび		あおだい しょう		備 考
	M	δ	M	δ	M	δ	
血 液	43	± 1.0	40	± 1.3	43	± 4.1	低温乾燥
肝	44	± 4.6	39	± 4.7	40	± 2.3	
筋 肉	<5		<5		<5		内容共
卵 黄	21	± 1.7	21	± 1.0	23	± 2.3	
胆 嚢	90	± 4.5	73		77		
小 腸	34	± 2.7	34		34		
小 腸	22	± 1.6	21		18	± 2	
脂 肪 体	64	± 1.6	62	± 2.0	62	± 1.4	血液共
心 臓	43	± 1.4	43	± 1	42	± 2	
肺	12	± 1.6	12	± 1	12	± 2	
腎	19	± 2.6	17		17		幼 生
卵 巢	34	± 3.4	32		26	± 2	
頭 部	42	± 4.5	40	± 4.1	37	± 3.1	
唾 液 腺	133	± 2.6	121	± 9.5	125	± 4.1	
皮	9	± 1.0	9	± 1.0	9	± 1.0	
幼生全体	23	± 2.2	22	± 2	23	± 1	

その結果わかつた重要なことは①脂肪体に多いこと筋肉に少いこと以外は大体組織間の濃度分布は予想した通りであつたこと、②全く予想の逆であつたことは、各種蛇の間で、最も著明な差が存在すると思われた唾液腺及毒腺の間に有意の差のなかつたことである。蛇毒内の特異な亜鉛の高濃度の存在の事実とこの成績とを如何に結びつけるか、今後の研究に大きな方向を与えた。

あるモデル衛生村の衛生動物学的調査について: 原淳・平木敬二 Hara, J. & Hiraki, K.: On the sanitary